

参考資料 1 委員提出資料

1. 春原委員提出資料 2 ページ
2. 戸上委員提出資料 3 ページ
3. 藤田委員提出資料 4 ページ

第6回 認知症施策推進関係者会議 春原治子委員提出資料

認知症本人大使「希望大使」 春原 治子と申します。
この度の資料を拝見し、認知症施策推進基本計画の策定にあたって、以下のとおり意見を申し上げます。



一つは、このスライドにありますように、特養入所中の仲間が地元地域のサロンに出かけたり、私達が施設を訪問して交流をしてきましたが、認知症が重度になっても、伝える力があり、分かり合えるという経験を積み重ねてきました。
どうか最後の時まで「声」を聴いて欲しいと思っています。

また、繰り返しになりますが、私は認知症と診断され、すぐに公表しました。
そして、「認知症とともに生きる希望宣言」を手にしたときは、本当に勇気づけられました。
ですが、1番目にある、「自分自身がとらわれている常識の殻を破り、前を向いて生きていきます。」という文章は、診断当初から、私には当たらない、どうしてもしっくり入ってきませんでした。何故ならば、歳をとれば誰もが認知症になり得る。私は、地域づくりセミナーで認知症になっても自分らしく、それまでと変わらず、生きていけることを学んでいたからです。

私は、診断後、空白の期間を体験することなく、オープンにして、同じ学びをした地域の仲間の中で暮らすことが出来ました。この会議に参加させていただいて、地域で「新しい認知症観」を根付かせることこそが、認知症の人の尊厳ある暮らしへの第一歩だとつくづく思います。
この1番目の項目が要らなくなる日が早く訪れますように、と願っております。
以上です。

言葉にならなくとも存在を認め合える喜び



第6回 認知症施策推進関係者会議 戸上守委員提出資料

認知症予防という言葉があります。

認知症にならないように、という意味なのでしょう。

どの様な予防が効果あるのか、私には分かりません。

どんなに予防しても認知症になってしまう人は多い事でしょう。

そんな認知症になってしまった私達は「ついてなかった」人なのでしょうが？

それが「ついてなかった」と言うのであれば、私はたくさんの「ついてなかった」人達と一緒に過ごし、笑い、泣き、怒り、癒されながら、毎日充実した楽しい日々を過ごしております。

そんな「ついてなかった」仲間を案じ、楽しく、同じ時間を共有していると、「ついていない事の無意味さ」を感じる今日この頃です。

「ついていない」か否かは、もっと後になって分かるものではないでしょうか？

認知症にならなくても、主体的な生活を送れていない人はたくさんいて、認知症になっても楽しく充実した生活を送れる人もいますからです。

だから生活の豊かさと認知症の有無は無関係だと思うのです。

人は認知症になっても、ならなくても、幸せに生活する事が望まれます。

「認知症になる→出来なくなることが増える→不幸になる」の方程式が勝手にイメージされてしまう世の中を、私たちはいつの間にか作ってしまったのではないのでしょうか？この方程式を「認知症になる→出来なくなることが増えてもしたい事をする→幸せになる」の方程式に変える必要があると思う次第です。

そしてこの方程式の「出来ない事が増えてもしたい事をする」を実現する時に、地域の力、家族や友人の手助け、専門職のスキル等の「手段」が必要になるのだと察します。現在の認知症の方々を取り巻く世の中は、この「手段」ばかり先行してしまい、認知症の方が「幸せ」を描き難くなっているのではないのでしょうか？

その「幸せ」を掴める社会が「新しい認知症観」を持つことで実現していくのでしょうか。

「認知症の有無は、幸せとは無関係」と国民の皆さんが思える未来を想像しながら、いつも私はにやけております。

「認知症施策推進基本計画（案）」について

（一社）日本認知症本人ワーキンググループ（JDWG）

代表理事 藤田 和子

「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」をもとに、新たな展開を生み出していくための基本計画となるよう、JDWGの本人たち、本人とともに活動をしている自治体担当者・関係者・住民の声をもとに、最終的な提案をさせていただきます。本人を含むすべての人たちが、方向性を一つにして力を結集して進んでいくための計画になることを、期待しています。

基本計画の新規性が、誰にでもシンプルに伝わるように

基本計画では、新たな展開を生み出していく内容が盛り込まれていると思います。一方で、何を変えていこうとしているのか、何にチャレンジする計画なのか、【この基本計画の新規性】が、本文を丁寧に読み込まないと、理解してもらいにくいと思います。

この計画が、新たに何を展開していこうとしているのか、誰にでもシンプルに伝わるように、今後、次のような内容を明確に示しながら、計画を普及していくことが必要だと考えます。

＜認知症施策推進基本計画～新たな展開に向けた6つのチャレンジ＞

- ① 認知症を、自分事として考える
- ② 目的は共生社会の実現、事業・取組を手段として
- ③ 誰もが「新しい認知症観」に立つ
- ④ 認知症本人の声と力を活かす、本人参画で進める
- ⑤ 本人を起点に、のぞむ生活の継続を、分野横断で
- ⑥ 各立場と地域の特性を活かし、活力ある共生社会を共創

基本的施策の着実な実施への期待：「本人発信」を重要ポイントとして

「本人発信」は、基本法、そして「幸齢社会実現会議」の取りまとめの中にもある重要な用語であり、今後すべての基本施策を着実に推進していくための重要なポイントです。計画（案）の本文内には本人発信に関する記載はありますが、基本施策の柱には「本人発信」という用語が掲げられておらず、社会全体や自治体関係者に、「本人発信」が重要ポイントという認識が浸透しにくくなるのが危惧されます。

最終的な計画、及び今後の計画の普及推進において、「本人発信」が重要であることをしっかりと明示していただくことを、強く期待します。

そして、本人発信がなぜ重要なのか、計画の目的を達成するために必要なのだという

ことを意識して取り組まれることを期待します。

重点目標の指標への提案：基本計画の新規性が明確となる内容へ

基本計画の新規性として、国民一人ひとりが「新しい認知症観」を理解していることが重点目標1に掲げられたことはとても重要と考えます。

重点目標1のプロセス指標、アウトプット指標、アウトカム指標がこの目標にそった一連の流れとなるよう、次のような提案をいたします。

○「重点目標1 アウトカム指標の2つめ：国民における認知症の人への態度尺度の状況」は、本人を対象化した内容であり、「新しい認知症観」の理解にはそぐわない。本計画として、この指標を明示するのではなく、今後、これに代わるよりよい指標を本人とともに開発することが必要と思われる。

最後に

自分の人生をあきらめず、自分らしく堂々と生きる認知症の人が、各地で増え続けています。私たち本人自身が声と力を発揮しながらともに生きていける実践を、各地の特性を活かして丁寧に生み出していくことを、基本計画第1期で、着実に進めていくことを切に願っています。